

2012年 11月 10日 Vol.0071

検察が「けもの道」に迷いこんでいる ②

■歴代内閣も頼かむりをする検察の裏ガネ問題

検察トップは、後藤田正晴氏のおかげで裏ガネ問題を封じ込むことに成功した。これは法務検察にとって、間違いなく自殺行為だった。反対に自民党政権は、検察に巨大な貸しを作った。権力の不正を追及する検察にとって、これは絶対に作ってはならない貸し借りだった。

山には、人間の目には決して触れることのない道がある。シカやイノシシなど野生の動物だけが知る「けもの道」だ。「カミソリ後藤田」は、密室でなされた黒い取引を「けもの道」と名付けた。人間が通るはずのない「けもの道」に検察はとうとう足をふみ入れてしまったのだ。

検察に牙を剥いた私は、実名による裏ガネ作り告発の準備を進めていた。2002年4月17日「週刊朝日」の山口一臣氏（同誌編集長）から私に直接連絡が入った。鳥越俊太郎氏が、自身がキャスターを務める「ザ・スクープ」（テレビ朝日系）で取り上げたい。ひいては同月22日収録取材をしたいとのことだった。私は了承した。

だが結果としてこれが命取りとなった。なぜか大阪高検公安部長室の直通電話で話した山口氏との会話が、検察サイドに筒抜けになっていた。後に山口氏が「直通電話のはずがどこかに転送された」と言っていたことから私の電話は盗聴されていたのだろう。おそらく鳥越氏との収録取材を「生放送」と勘違いし、すぐに「三井を止めなければまずい」と私を逮捕するために動き出した。収録当日の朝、私は自宅の前の玄関先で大阪地検特捜部の検察事務官から任意同行を求められ、大阪地検に連行されたのち、突然逮捕された。前日21日深夜、後述する「電磁的公正証書不実記録・同供用罪」により私に対して裁判所から逮捕状が下りていた。ワキが甘かった

と言われれば、反論の言葉はない。まさか検察が事件をねつ造し、いきなり逮捕してくるとは夢にも思っていなかった。

口封じによって逮捕・起訴された私は有罪判決を受け、懲役1年8月の実刑を下された。2008年10月17日に収監されてから15ヶ月を経て、2010年1月18日満期出所した。

満期まで懲役刑を勤めなければならないケースなど、実はほとんどない。刑期中に問題行動を連発したり、よほどタチの悪い事件でも起こさない限り、満期出所などあり得ない。なにしろ仮釈放が却下される率はたった2%程度なのだ。

獄中での私は、模範囚と言っても差し支えない行動を心がけていた。だが私の仮釈放申請書は却下された。どうやら「厄介な存在の三井は出来るだけ塙の中に閉じ込めておけ」ということらしい。法務省がどれほど私の存在を苦々しく思っているかがうかがえるだろう。

■「けもの道」の出口はどこにあるのか

2002年4月23日、私の逮捕に際して原田検事総長と森山真由美・法務大臣は会見を行い、こんな言葉を口にした。

「検察の組織的な裏ガネ作りは事実無根だ。そもそも存在しない」

検察は今に至るまで、裏ガネ作りの実態を全く認めていない。市民オンブズマンや法務委員会における野党議員からの追及に対しても、歴代法務大臣も検事総長も「存在しない」の一点張りで逃げおおせてきた。その現実には、自民党から民主党への政権交代が起きた2010年の現在に至っても変わっていない。

検察は絶対に通ってはいけない「けもの道」に足を踏み入れてしまった。裏ガネ問題について自浄作用を発揮することもなく、対外的にその存在を認め、謝罪したことは1度もない。自民党政権に大きな借りを作った検察は、捜査機関が本来果たすべき役割を見失い、暴走を始めた。「検察の正義」は見るも無残に崩れていった。その淵源は、後藤田氏が描いた「けも

の道」にあったのだ。

「けもの道」の出口は、いったいどこにあるのだろう。

ひょっとすると、もう周囲が何も見えない「けもの道」の深みに、検察は迷い込んでしまっているのかもしれない。多くの検事は、悪事を暴くため今日も必死に現場で汗を流している。組織のガンは裏ガネという禁断の果実を貪りながら、自分の出世と組織の存続しか考えない一部の幹部である。それが、これから取り上げる5つの特捜事件のように強引かつ独善的な捜査を繰り返す温床にもなっている。

出口にたどり着くまでには、多くの血が流れるだろう。

それでも私は、愛着あるこの捜査機関の「最後の良心」を信じている。

「権力」に操られる検察 （双葉新書 三井環著）より
終わり

著者：三井環（元大阪高検公安部長）